

## 第十二代総長 西原春夫先生に聞く

### はじめに

早稲田大学百五十年史編纂委員会では、『早稲田大学百五十年史』編纂を目的として、総長・理事・教員・学生など、様々な立場で早稲田大学に関わってこられた方々からの聞き取りを進めている。その一環として、今回、第十二代総長西原春夫先生へのインタビュー記録を掲載する。

インタビューは二〇一五年一月二日（月）、一三時～一六時、大隈会館N二〇三会議室で行われた。インタビューアーは大日方純夫編纂専門委員長、浅古弘編纂専門委員長及び事務局スタッフの木下恵太がつとめた。

西原先生のご略歴は左の通りである。

- 一九二八（昭和三）年 武蔵野市生まれ
- 一九五一（昭和二六）年 早稲田大学第一法学部卒業
- 一九五六（昭和三一）年 同大学院法学研究科博士課程修了
- 一九六二（昭和三七）年 法学博士。ドイツ・フライブルク大学に留学
- 一九六七（昭和四二）年 早稲田大学教授
- 一九七二（昭和四七）年 早稲田大学法学部長
- 一九七八（昭和五三）年 早稲田大学理事
- 一九七九（昭和五四）年 マックス・プランク外国・国際刑法研究所（ドイツ）留学
- 一九八〇（昭和五五）年 早稲田大学常任理事
- 一九八二（昭和五七）年 早稲田大学総長（第二二代）
- 一九九〇（平成二）年 総長退任
- 一九九五（平成七）年 早稲田大学ヨーロッパセンター（ボン）館長（一九九八年まで）
- 一九九八（平成一〇）年 早稲田大学定年退職。学校法人国士館理事長就任（二〇〇五年まで）
- 現在、一般財団法人アジア平和貢献センター理事長、少林寺拳法東京都連盟会長、一般社団法人全私学新聞代表理事、社団法人日中協会理事、公益社団法人日本中国友好協会顧問、日本日中関係学会顧問、学校法人日本女子大学顧問、公益財団法人矯正協会顧問など。

委員会の依頼に快く応じて下さった西原先生に厚くお礼申し上げます。

（早稲田大学百五十年史編纂委員会）



## 中国との関係

司会 それでは、よろしくお願いします。先生は総長の時代から中国との関係をたいへん重視なさいました。ご承知のとおり、現在の早稲田大学も、国際化ということを非常に大切にしていますが、早稲田と中国の関係について、最初にお話しただければと思っております。

西原 一九八二（昭和五七）年に総長選挙があつて、一月六日から第十二代総長になったのですが、その前は、私は教務担当常任理事でした。八二年の一月に、駐日中国大使館から大学の方に、「北京大学が早稲田大学と協定を結びたいといっている」という話があつたのです。「中国の大学の中で、日本の大学と協定を結んだところは一つもない、最初である」ということでした。そこで、その話がすぐ担当常任理事の私のところに来ました。

私は個人的には前向きに受け取るべきだと考えたけれども、慎重を期して、中国関係の先生方、例えば、安藤彦太郎先生（政治経済学部）、岸陽子先生（法学部）といった方々に相談したところ、「これはぜひ受けるべきだ」ということでした。そこで、機関で決定をして、六月に私が調印に行くことになりました。実は、この時、私は初めて中国へ行つたのです。この一二月で七十八回目の訪問となりましたが、その第一回がこの八二年六月の調印の際でした。

そこから関係が始まって、しばらくは大学の総長として中国の大学、例えば復旦大学、上海交通大学などと協定を結んできた。だんだんと関係が深まる中で、私は刑法が専門であつたところから、八六年に上海市の対外友好協会より講演に呼ばれた。早稲田大学ではその少し前から、安藤彦太郎先生の発案で、中日友好協会と上海市人民対外友好

協会の日本語通訳を呼んで、日本語の再教育と日本事情の教育を受けさせるプロジェクトが始まっていたのです。私への招待はそれへの御礼という意味があつたようです。その時、会長の李寿葆先生が大変手厚くもてなしてくださつて、講演の翌日に汽車に乗つて、杭州と紹興の観光に同行してくださつたのです。

その往きの汽車の中での話ですが、中華人民共和国は一九四九年に成立したが、刑法や刑事訴訟法はなかつた。それは毛沢東の一つの考え方で、「倫理・秩序というのは民衆の力によつて維持すべきものである」と。中国では人民裁判方式を採用していて、法律は要らない。むしろ社会主義道徳でもつて規律や秩序を守るべきだという一つの考え方があつたのだらうと思います。確かに、政府として刑法制定についていろいろな準備活動はやっていましたが、一向に急ぐ気配がなかつた。ところが、一九七〇年代から八〇年にかけて、例の文化大革命が起つたら、ひどい人権侵害が起きたでしょう。それで、法律がないといかに大変かということを実感して、文化大革命が終わるや否や、すぐに刑法と刑事訴訟法を制定しているのです。それは七九年のことですから、十年もたっていないけれども、とにかく刑法、刑事訴訟法は出来た。

社会主義国と資本主義国では政治体制が違うから、違う部分もある。しかし、刑法というのはだいたい共通の部分が多い。私は「そろそろ日中の間で刑法学の共同研究をやつたらどうか」と話したのです。「それはいい話ですね。いずれ考えましょう」というお答えになるかと思いきや、「それはいい考えだ。やりましょう。来年、上海でやりましょう。お金はわが対外友好協会が出します」と、即答があつたのです。こちらとしてはびっくりして、帰国してみなに相談したら、「ぜひやろう」と。ただ、「来年というのはちょっと準備不足だから、十分準備を重ねて再来年にやろう」ということで、一九八八年に歴史上初めての日中刑事法術討論会を上海で開催したのです。これが第一回で、私としてはあと日本でもう一回やつて、一往復ぐらいで終わりかなと思つていたら、何とそれが今日まで続いている。

二年に一度ずつ、場所を中国と日本で交互にして、二〇一五年一〇月は早稲田大学で第十五回目を開催しているのです。一九八八年以来継続している。例の尖閣列島問題が起こって、二〇一一年から一二年にかけ多くの日中交流行事が中止ないし延期になりましたが、全然その影響がなかった。刑法とか刑事訴訟法は非常に微妙な問題を含んでいるでしょう。国際的な批判を受ける問題もある。それにもかかわらず、日中刑事法について全く影響がなかったというのは、それだけの信頼感が確立してきたということを意味するのですね。そういうことで、私個人としても、日中の学術交流は、他の人ではできないことをしてきましたと思っています。ただやはり、早稲田大学の中国に対する伝統が背景にあるということを、つくづく感じます。

大隈老侯は「東西文明の調和」という考え方を述べられた。これはやはり、早稲田の国際交流の核心でなければいけないと思うのです。チグリス・ユーフラテスのあたりから発生した文明は、西に向かってヨーロッパを通り、そして大西洋を渡ってアメリカに渡り、そこから太平洋を渡って日本に来た。東に行った流れは、インド、中国、朝鮮半島を経て日本に流れ着いて、そこで止まる。両方の流れが日本でぶつかった。したがって、日本の役割というのは、東西文明の調和、つまり、「いいところを取り入れて、それを世界に向けて発信する、そういう役割を日本は背負っている」と。私もそれに大変感銘を受けました。

清国留学生部も出来て、早稲田大学は早い時期から非常にたくさんの留学生を受け入れた。その中には、のちの革命の闘士もまざっていて、一番象徴的なのが李大釗です。今でも、早稲田大学は、中国の民衆全部が知っているわけではないけども、上層部の人には、「中国共産党の創立者で、かつ毛沢東に社会主義を教えた人が学んだ大学は、早稲田大学である」という評価があるのです。ハーバードやケンブリッジとか、東大とも違った評価があるのはそこなのです。

現に、私は数年前に李大釗のお墓参りに行きました。何せ早稲田の大先輩ですからね。北京の西の方の中央墓地にあって、銅像もあるのですけども、そのお墓の裏に李大釗記念館というのがあるのです。そこに入ってみたら、正面に大隈講堂の大きな写真がバーンと掲げられている。それから、大隈講堂の写真の脇に、彼が早稲田大学在学中に勉強したたくさんの本の扉が写真になって、壁にかかっている。だから、もうその記念館へ入れば、「李大釗の母校は早稲田だ」と、こういうことがはつきりするから、これはすごい効果があります。

本当のことを言いますと、李大釗の在学中はまだ大隈講堂はありませんでした。調べてみたら、ちょうど李大釗が国民党政権に捕まって処刑された年に、大隈講堂は出来ている。一九二七（昭和二年）のことです。だから、「李大釗が早稲田大学に学んだ」ということで大隈講堂を掲げるのは、事実に反するわけですが、やはり早稲田大学の象徴は大隈講堂ですから、それが掲げられるのは当然だろうと思うし、私としても大変うれしい気持ちがある。やはり、早稲田にはそういう伝統がある。

しかも、安藤彦太郎先生の『未来にかける橋 早稲田大学と中国』にはつきり描かれているように、留学生の受け入れをしたその前段階がある。青柳篤恒先生という、その道の大家が中国語と中国事情を教えておられて、そこから優れた門下生、例えば松村謙三、中野正剛、緒方竹虎といった人々が出ていなのです。そういう背景があるから、清国留学生部へも中国の優れた若者が来た。その人たちが帰国後実績をあげることによって、中国における早稲田大学の評価があると思うのです。私もそういう伝統を背負って、伝統の継承者として活動してきたつもりです。

ちよつと一つ、ここでお話があるのですけども、一九八二年の早稲田大学創立百周年の際に、関係の深い外国の方に名誉博士を差し上げようということになった。私は理事会の中で、「そういう長い歴史があるから、中国のどなたかに名誉博士を差し上げたい。一番適任なのが、中日友好協会会長の廖承志さんではないか」と。ただ、廖承志は早

稲田大学の学部ではなくて、高等学院に一年しか在籍していません。

どうしてかと言えば、廖承志の父親廖仲凱はやはり早稲田の高等予科に学んだ方ですが、帰国後孫文を扶けて大活躍し、国民党に暗殺された。母親の何香凝も有名な革命家です。そういう家柄に育った人ですから、入学早々政治活動をやって、二回も捕まっているのです。当時の「赤狩り」の真つ最中に共産主義の運動をやったんですから。結局、廖承志は二回目に逮捕された際に、国外追放になった。しかし、廖承志は後に早稲田に大変感謝し、大変いい感情を持っていた。退学処分になっても当然なのに、早稲田は授業料未納抹籍という扱いにしたからです。「また授業料を納めれば入ってもいいよ」ということになりますから。

それからもう一つは、警視庁に捕まっている間に、当時の高等学院の担任の中谷博先生が、赤狩りの真最中にもかかわらず警察にもらい受けに来てくれたんですね。廖承志はその先生に大変感謝し、尊敬をされた。それで、まだ日本人がほとんど中国へ行ったことのないような、国交回復前の早い時期に、中谷先生ご夫妻を中国に招いて、非常に手厚くおもてなした、という話があるくらいです。

廖承志といえ、国交回復前の高碕達之助の名前が出ますね。

司会　　LT貿易ですね。

西原　ところが、LT貿易の前段階として「いづれ国交回復しなければ」と言って努力したのが、早稲田卒業の政治家松村謙三なのです。それから川崎秀二、石橋湛山もそうでした。そういう井戸を掘った人たちの窓口になったのが、やはりその廖承志さんでした。



考えてみますと、当時はまだ日本のやったことへの恨みが渦巻いている時期に、「日中は仲よくしなければいけない」と言うのは、相当勇気のいることだったと思います。それにもかかわらず、そういう努力をしたのは大変なことだったと思いますので、「廖承志さんに名誉博士を差し上げるのが適当ではないか」と理事会に提案したところ、全員一致で「そうしましょう」ということで、八二年の創立百周年を機に差し上げることが決定しました。

残念ながら、来日される少し前にお風呂場で転んで体が動かなくなったというところで、ご令息と、その後中日友好協会の会長になって、早稲田からまた名誉博士を差し上げた孫平化さんが代理で受け取りに来てくださって、学位記と学位章、ガウンをお渡しした。廖承志は大変喜んで、そのガウンを着て。

司会 お写真があります。

西原 ちょうど、安藤彦太郎先生と岸陽子先生が中国へ行っていたとき、学位章の着け方について、「この辺、どうやるんだ」と、問い合わせの電話があった。そうやってガウンを着て、大変喜んでいたそうです。今でも、廖承志記念館にその写真が飾ってあります。その廖承志は、私が総長になった翌々年に亡くなりました。早稲田の出身であり、その名誉博士でもあるので、「お葬式に行きたい」と申し出たところ、中国政府から招待された。五十六人に限定して、その中には松村謙三夫人や、岡崎喜平太、有吉佐和子とか、当時日中交流の井戸を掘った方々、あるいはそのご遺族の方々、もう大変さ堪比やかなメンバーだったのですけど、その中に加えていただいて葬儀に参列した。

北京空港に着きましたら、中日友好協会の方からこういう話があった。「今回は非常に急いだこともあり、十分に部屋を準備できず、大変申し訳ない。二人相部屋にならざるを得ない方も出るけれども、よろしく」と。私は一行の

中で一番若い部類でしたから、それも当然に思っ、同行した山代〔将〕さんに「山代さん、一緒に泊まろうよ」と、そういう話をしていたのですね。ところが、案内された部屋を見てびっくり仰天、北京飯店の最高のロイヤルルームだったのです。中国ではご承知のように、壁沿いにソファを並べ、ソファとソファの間には机を置く。それが十五人分ぐらいつながって、閣僚会議ができるような広い応接室があつて、その他に書斎、控え室、寝室がある。そこへ一人で泊まれと言うわけです。ソファにしても肘掛けがこんなに厚い。そこへ沈むように座つて、「一体これは何だ」と。「確かに、廖承志さんに名誉博士を差し上げる提案をしたのは私だけでも、これは西原個人の問題ではない。長年にわたる、早稲田大学の中国への貢献に対する感謝と敬意の表れと見るべきだ。これは大変なことだ」ということです。私のその後の中国に対する関わりの原点が、実はその大きなソファでの想いにあつた。そういうことがありました。

そして、三十年間、日中の刑事法の交流で経験を積むとともに、人脈ができて、信頼感やおそらく尊敬の念も得てきたのではないのでしょうか。例えば、私が八十歳になったときに、二つの中国の大学でお祝いのシンポジウムをやってくれました。こんなことは、普通では考えられないですよ。西原というと単に日本の先生というのではなく、「日中共同の、アジアの老先生」という評価があるのでしょうか。

それから、中国社会科学学院とも大変親しい関係にあります。私の場合は、その中の日本学研究所よりむしろ法学研究所が中心ですが、二〇一三年には、歴史や歴史認識に関する六回の連続講演を一人でやらせてくれました。ただ、中国の場合、大学もありますから社会科学学院だけと交流するというのは、望ましくないのです。ですから、私はわりあい柔軟に広く交流しております。

## 早稲田と国際化

司会 ありがとうございます。ヨーロッパとアメリカの方についても、先生は大変お詳しいと思うのですが、いかがでしょうか。

西原 大学の国際交流というのには、やはり大学の個性がいると思います。「なぜそれを早稲田がやるのか」という、その理論や思想。そこには早稲田らしさや、早稲田ならではの特色を持つべきで、世界における日本の位置付けや役割との関連で考えていくべきだと、私は思っているのです。

当時、私が国際交流を担当して、最初に出てきたのが中国だったのです。北京大学と協定を結びました。その次が高麗大学。高麗大学を発展させた金性洙さんは早稲田出身（大正五年卒）です。その方の息子さんが金相万、高麗大学の理事長、東亜日報の社長であり、言論と教育機関と両方で活躍された大変立派な方です。それがまた、早稲田の法学部の私の先輩（昭和十五年卒）であるということから、関係が深くなりました。早稲田は私立ですから、高麗大学という韓国有数の私立大学と連携するのは、非常によい。中国はご縁があったから北京大学。その結果として、日中韓の研究交流、あるいは相互促進の拠点を、北京大学、高麗大学、早稲田大学のトリオに求める。そういう構想が出て来ました。

しかし、やはりわれわれは東アジアだけでなく、世界に目を向けなければいけない。これをどうするかと考えて、出てきたのがまずボンなのです。当時、ヨーロッパはちょうど統合に向けて努力をしていました。私は、「これはヨー

ロッパだけの現象なのか、それとも人類の行くべき道の先駆的現象なのか、という問題をはっきり捉えないと、アジアや日本のあり方は分からない」と考えました。まだ八〇年代のことで、今と違い、「アジア共同体」という枠組みを考える人などあまりいなかった時期です。けれども、もしその現象が、ヨーロッパだけの現象であるとするならば、アジアには適用できない。その辺を考えるためには、なぜ何百年も戦争ばかりしてきた国々が一つの傘の下に入ろうとしているのかということ、現場でいろいろと調べて、感じて、察知しないといけない。そのためには研究拠点がある。そこで、最初に宿泊施設も設けた研究拠点を作ったのが、ボンのヨーロッパ・センターなのです。

なぜボンかと言いますと、ブリュッセルはEU政治の拠点そのものですから、それに巻き込まれやすい。そのEUの流れをちょっと距離を置いて見るためには、やはりドイツかフランスか、そちらの観点から見た方がよい。たまたま私がドイツ派であり、それから、ちょうどドイツは首都がベルリンに決まって、ボンから移転するという時期でした。そのボンの役割が低下するときに、ボンとしてはどうすべきかという考えをしている。ボンはブリュッセルに近いし、長年の友好大学であるボン大学があるばかりでなく、フンボルト財団とか、DAADとか、ドイツ大学学長会議という組織があります。それから、EU委員会のドイツ支所とか、首都はベルリンに移ったけれども、とりわけ学術的なものが残っています。そうした点からボンが一番適切ではないかということで、ボン大学にお話をしたところ、ボンの方ではそのことをきっちりとして位置づけてくれました。そして、ヨーロッパ・センターの設立を手伝ってくださって、私は三年間、館長として赴任しました。本当によい勉強になりました。

やはり、国際交流というのは人間なのです。例えばボンでは、年に一回ライン川の花火という大きな行事があります。両国の花火とは違って船に乗って行くのですが、市長がわざわざ私を呼んで、自分の脇に私を座らせたのです。それから、日本大使館にはいろいろなお客様があり、重要なパーティーがありますが、必ず私を呼ぶ。ボン大学でも、

例えばどこかの学長に名誉博士を差し上げる儀式やパーティーがあると、必ず私を呼ぶ。つまり、私はボンの名士なのです。それが早稲田である、ということ。その重さを無視してはいけません。だから、ボンから見た日本の大学といえば、早稲田一辺倒です。そうなってしまうのです。

司会 お金に換えられない値打ちがあるんですね。

西原 そういう背景がありますから、特別な知識や情報ももらえる。それはすごかったです。

結局私が出した結論は、「ヨーロッパ統合はヨーロッパだけの現象ではない」ということです。科学技術が発達するほど、どうしても国境を超えるものが増えてくる。増えてくれば、国境は邪魔になる。邪魔になれば低くならざるを得ない。低くなりつ放しというわけにいかないから、上部的な統合機関がある。いずれ国連に行くだろうけれども、今、国連がその役割を演じられなないとすれば、一種の地域共同体となる。最初は共通のルールを作り（立法、それをもとに共通の取り締まりをする。それが行政で、その次が司法。国だけにあつた三権がだんだんと上部団体の方に移っていくざるを得ない。これが必然の成り行きです。

しかし、アジアはヨーロッパとはかなり違うから、ヨーロッパのような同じ形の共同体は作るべきではない。けれども、「その流れというのはもう不可避だ」という結論に達しました。そして、その後はこのことを前提にして、アジアで活動してきたのです。

ボンではものすごく勉強になりました。本当は、あのセンターをもっと早稲田として活用してもらいたいと思っていましたが、今度、閉鎖になるのですね。一橋大学は、ブリュッセルにそうしたものを作ろうとしている。そうい

う時代に、存在するものを閉鎖するというのは残念です。ただ、国際交流はやはり人間なのです。制度ではない。そういうことを思っているのです。

それから、オレゴンと早稲田の関係についてお話ししておきたいと思います。

これは、ゴールドシュミットという州知事が早稲田にいらっしやって、「今までアメリカは東海岸だけが栄えていたけれども、これからはアジアの時代だ。西海岸を重視しなければいけない。その拠点として、確かにカリフォルニアが西海岸としては栄えているが、それだけでは足りない。そこで、西海岸のオレゴンをアジアの窓口にしたい。いろいろ考えると、出てきたのが早稲田大学だ」と言うのです。「どうしてですか」と聞いたら、「私は、例えば日本の企業の社長がどこの出身者が調べると、確かに東大が多いことをちゃんと知っている。ところが、私が話をする常務取締役や部長といった人たちは、ことごとくと言ってよいくらい早稲田だ」と言うのです。そこで、「将来の日本は早稲田だ」ということで、早稲田と提携したいと言ってきた。

この考え方、「二十一世紀はアジアの時代だ。アメリカはアジアのことがまったくだめで、これではアメリカは発展しない。アジアのパワーとアジアとの関係も重視しなければならない。オレゴンがその中心になる」ということに、私は大変共鳴しまして、「それでは、オレゴン大学といういろいろ提携を結んでやりましょう」という話になりました。彼は「それを強化するいろいろな組織を作りましょう」と言って、私を財界人に紹介したのです。例えば、ナイキ。

司会 なるほど。スポーツ用品の企業ですね。

西原 オレゴンの郊外の事務所で、ナイキの社長に会いましたが、なかなかすごい人でした。そういう人をきちんと

紹介をして、「いざとなったら協力するよ」というところまで行きましたが、ゴールドシュミット知事が辞めてしまつた。それから、私も総長の任期が終わつたので、それがそのままになった。

私はこう考えたのです。日米欧の時代はしばらく続く。したがって、そのアメリカの代表としてハーバードとかMITではなく、そういう新しいアジア志向の政策理論を持った大学として、オレゴン大学。そして、ボン大学、早稲田大学。そして、その早稲田を介して北京大学と高麗大学があるでしょう。日米欧と日中韓を合体させる拠点は早稲田ではないか。そこまで考えて、これを進めたいと思つていううちに、終わりになつてしまつたということなのです。

それがその後、どうなっているかよく分かりません。やはり私は「まず世界の中の日本の役割があつて、そこに學術、文化があるべきである、その學術、文化ということになると早稲田の出身がある」と考えます。当面はまだ「日米欧、日中韓があつて、そのくさびに早稲田大学がある」という位置づけは、通用するのではないかと、私は思うのですね。それは大隈老侯の「東西文明の調和」という思想にも合致します。量的に数を増やすのではなく、フィロソフィーがないといけない。つまり、「日本の世界における役割、これとの関係におけるわが早稲田大学の役割」という思想があるべきだと思っています。

面白いことには、ゴールドシュミット知事の事務所に、私とニシヨットの写真が飾つてあつたそうです。お客さんが来て、「これは誰だ」と問うと、「これは日本のプレジデントだ」と答える。「日本には天皇がいて、プレジデントはいないのではないか」と問うたら、ゴールドシュミットはニヤツと笑つて、「彼は早稲田のプレジデントだ。早稲田のプレジデントは日本のプレジデントなんだ」と言つたそうです。そういう人間関係が大切なのですね。

## 不正入試事件

司会 それでは次に、先生が解決に取り組まれた不正入試事件について、お話しいただけますでしょうか。

西原 私が、その入試不正事件の担当をして分かったのは、早稲田の入試において、印刷所職員が問題用紙を盗むという行動の背景に、闇の中にうごめく悪のシステムが存在していたということです。これは非常にはつきりして、なぜ商学部だったかということもこの本〔西原春夫『早稲田の杜よ永遠に』小学館、一九九五年〕に書いてある。つまり、大学内部に悪い幹部職員がいて、それを籠絡する人脈が幾つかある。そこに入試ブローカーが介在している。当時、早稲田の相場は一千万円でした。そういう人たちにとり、お客として一番役立つのは政治家の秘書です。なぜかと言うと、選挙民の中に子どもを早稲田に入りたい人がいっぱいいて、中には何千票ももっている人もいるわけです。秘書は、政治家そのものは知らなくても、必死になって間を取る。だからブローカーの次に出てきたのが政治家や会社社長の秘書でした。そういうシステムが出来上がっていました。

それともう一つ、これは私の人生論ですけども、入試不正事件がなかったら絶対に私は総長になっていないのです。清水総長の常任理事には、正田（健一郎）さんと勝村（茂）さんというお二人の常任理事がいました。次期の総長として、自他ともに許すような大変優れた人で、私たちもそう思っていた。

一方、私は国際交流担当の平理事でした。本当は、その理事さえも私はお断りしていたのです。村井総長の時代の終わり、一九七八（昭和五三）年、次期総長に決まった清水〔司〕先生が組閣するときに、「手伝ってくれ」と言われ



ましたが、私はお断りした。それには理由があつて、翌一年間、ドイツへ行く予定を立てていた。これは私の研究の長いプランの中に位置づけていたものでした。ただ、清水先生あるいは参謀役は実に粘り腰でした。私は大学紛争まっさかりの時期に法学部の学生担当として苦勞したことがありましたから、そのことを評価して、やはり「あいつを使うべきだ」となったのでしょうか。そこで、国際交流担当の平理事という新しい役職を作り、清水さんが私に「半年で何とか手を打ってくれないか。半年なら海外に行くのを認めるから」とおっしゃった。私は「そこまで口説かれたらしかたないな」ということで、平理事をお引き受けしました。ところが、半年の在外研究を終えて帰ってきたら、入試不正事件が起きてしまった。

確かに印刷所職員の行動は窃盗ですから、警察との対応も出てくる。そういう理由で、事件発覚直後、教務担当常任理事の正田さんから、「この事件の処理は、刑法が専門のあなたがやってくれ」と頼まれて、「それでは、お受けしましょう」ということになった。

事件処理の経過や内容については以前ご報告したように記憶しますが〔前掲『早稲田の杜よ永遠に』一一七―一二五頁〕、本当に大変だったのです。新聞記者からも逃げ回って、もう大変でした。

結局、責任を取ってという言い方はしなかったけれども、三月末日をもって「人心一新のため」ということで、教務担当の正田さんと総務担当の勝村さんが常任理事を降りられた。入試は教務担当、職員人事は総務担当なのです。そうすると、清水総長としては、不正入試事件の処理を曲がりなりにもやってのけたということで、私を常任理事にした。その後、さらに所沢・幕張論争が起こって、大変なことになったのです。それもまあ何とか克服したということで、私が総長候補になったわけです。

あの不正入試事件というのは、一種の天のシナリオと考えるしかない。そのシナリオからすると、私が総長をやる

ようになってしまっている。その人がやらないと混乱するし、天のお指図だとすれば、それに背くことはできないと思います。」「私は総長の任ではないが、受けましょう」と言って候補者になったといういきさつがあるのです。

不正入試事件がなかったら、その後の早稲田の歴史は変わっていたでしょう。私は総長にはなっていなかった。勝村さんは所沢・幕張論争で直接所沢を推進した方だったのです。私は、結局、所沢を推進せざるを得なかったけれども、もともと第三者でしたから、大学が真つ二つになるところまでにはいかなかった。そういうことを神様が読んでいる、ひょっとしたらそういうことかなと思うのです。早稲田の歴史の中にはこうした偶然があるのです。そもそも、不正入試事件で欺されて模範解答を作った学生が掲示された出題問題を読む可能性は少なかっただろうに、現実には読んだ。読まなければあの不正入試はその後もずっと続いたことになります。そう考えると、人生というのはずっとするくらい恐ろしい。そのことを痛感する一連の出来事でした。

### 本庄校地の利用計画

司会 次に、本庄校地の利用計画について、お聞きしたいのですが。最初、「本庄に国際的な学部を作る」というお話があったとも聞いておりますが。

西原 本庄校地を取得したのは大濱総長の時代ですが、大濱さんは本庄の人々に対し「何を作る」とは言っていないのです。「大学の学部を作る」ということも言っていない。ただ「いずれ校地を活用する」という言葉は使っている。安い価格で買い入れて、ある意味で本庄としては寄付したような感じだったのです。それが長い間放置されていると

いうことで、一九七九（昭和五四）年に本庄から文字どおりむしろ旗を立てて交渉にやってきたのです。それまで勝村さんが対応していましたが、先にお話ししたように、勝村さんが降りてしまい、私がそれを担当することになりました。

とにかく、あれだけの土地を安い価格で譲ってくださったのだから、活用しなければいけない。「これはわれわれの責務である」と受け取らざるをえませんでした。何か具体的な案を作らないと了承頂けないということで、いろいろ考えて、本庄高等学院とセミナー・ハウスの建設をすることにしました。それから、今本庄に新幹線が止まっているでしょう。あの駅のある場所は、私の総長時代には早稲田が所有する飛び地になっていました。たまたまキャンパス内に本庄市の所有する河川とか道路などの部分がばらばらにありましたので、それをまとめて、本庄と等坪交換ではなくて、等価交換をしました。早稲田としては、こうした飛び地はない方がよい。私は、本庄に新幹線が停まれば、早稲田にとってもよいし、本庄にとってもよいと思いましたので、その譲れるぎりぎりのところを研究した上で、飛び地を譲ったのです。そのお蔭で、現に駅が出来たわけでしょう。これも本庄市と和解する一つの条件でした。駅の開通式には呼ばれませんでした。お蔭で、実を言うと、この駅の開通には私の知恵が働いていたのです。職員がもう大変な努力をしてくれたのですが、私個人としても本庄に大変で、努力しました。

村井総長なり時子山総長も大変な努力をされましたが、私は私なりに現場でものごく苦勞し、私ならではの知恵を働かせて、不正入試事件以来、早稲田をどん底から救い上げてきたという自負があります。やはりそれらの位置付けについては、『早稲田大学百五十年史』の中できちんと触れていただきたいものです。



## 所沢・幕張論争

西原 そのようにして、本庄校地については折り合いをつけた。ところが今度は所沢・幕張論争です。その論争が起った経緯については、前に詳しく報告したので〔前掲『早稲田の杜よ永遠に』一二六―一三四頁〕、ここでは裏話に限ることにします。所沢の土地は、半分は西武の所有地で有利な条件で取得可能でした。しかし、残りの土地は地権者が百十人に分かれていた。そのうちの十人が売却に反対していたのです。土地とりまとの責任者である農協の組合長と先祖代々仲が悪いといった感情的な対立が絡んでいたり、金銭的利益にからむいろいろな条件を出されたりした。それをまとめて説得するのは大変だったんです。

私は、最初、退任した正田さんと勝村さんの後任として、教務担当と総務担当の常任理事を務めました。そのうちに、一時、所沢・幕張や本庄などの土地問題を扱う施設調度担当も兼任した。これは大変です。普通のときでも大変なのに、当時は創立百周年の問題がありました。これは教務の仕事です。それなのにさらにやっかいな施設担当を兼ねるとするのは、本当に普通ではできないことです。さすがに大変だということで、清水総長は施設調度の担当を理工学部のトンネル工学の先生にお願いしたのです。トンネル工学が専門ですから、施設のことは詳しいだろうという事です。その先生は豪快な方で、快く引き受けてくださった。

ところが、百十人の地権者のうち、まだ八人から承諾が得られていない段階で、「まとまったら土地を取得します」という決議を評議員会でしなければならなくなりました。そうしたら、私がちょうど学会出張しているときに清水総長から電話がかかってきて、「大変だ、大変だ。すぐ帰って来てください」と。それで帰ってみたら、その豪快な

先生がうなだれている。

よく考えてみたら、われわれ社会科学の人間というのは、勘をめぐらせて物事を進めてしまうんです。「これはこういう流れからしてどうしたってまとまる」と。「まとまるから、それを前提条件にするならば、決定すべきときには条件付きで決定できる」、これが社会科学の見方なんです。ところがトンネル工学というのは、100%安全だという事実が明らかにならないと掘り出せない。だから、八人の地権者が承諾していない段階でトンネルを掘り出す、つまり、「土地を取得します」ということは、絶対に言えないんです。だから彼は、すっかり悩んでしまった。実に学問に忠実な方だったんだと今から思うんです。それで、結局、仕方がないから、施設担当も再び私が兼ねるということになった。そして、七時間半掛けて、幕張を強力に推進される有力評議員やその支持者のおられる評議員会を乗り切ったわけです。

実のところ、村井総長時代、幕張を候補地にするという理事会決定はなく、村井総長は口頭で進めていただけでした。だから、理事会決定がなく、文書にも残っていない以上は、全く関係ない人が新しく総長になったら、新しい方針の下に考え直しても一向に差し支えないということに建前上はなる。実際は「前総長が言っているのと違うから、その辺を上手く調整してください」という話にはなるでしょうけれど。

ところが、清水総長は村井前総長時代の常任理事だった。だから、形の上では、それまでの経過を全部知っていて、しかもそれを推進していた人が、新しく常任理事になった勝村さんの意見を入れて意見を翻したということになる。そこで、村井前総長としては烈火のごとく怒ったということですね。

後から考えてみると、あのときはいろいろなやり方があつて、あれほどまでに学内外が真っ二つに分かれる事態は避けられたのではないかと思います。しかし、あのときはまだまだ私も未経験でしたから、突っ走ってしまったんで

す。あの評議員会は一生忘れられません。七時間半、もう茨のむしろに座っている思いでした。でも、結局、押し切ってしまった。その押し切ったことが総長選にも影響して、所沢・幕張論争の延長線上で選挙運動が行われるということになってしまった。

### 総長選挙

西原 しかも、不正入試事件以来早稲田に張り付いて、先生たちのこともよく知っている担当の記者がどの新聞にもいた。そして不正入試事件の延長線上で所沢・幕張論争があり、その延長線上で総長選挙があつたから、記者たちはこぞつてそれを書いたんです。あれほど学外に報道された総長選挙は他にないと思います。

ただ私として、今でも誇りとするのは、対立候補の本明（寛）先生にしても私にしても、個人としては一切相手方の批判をしなかった。本明先生も立派です。私の批判をしたことは一度もありませんでした。誹謗中傷は周りの人が言っているのです。一度、ひどいことがありました。私を誹謗する怪文書が流れた。完全に事実と反する内容のものでしたけれども、それを私自身が否定しても説得力がありませんから、その代わりに、最高裁判所の判事や元検事長など法律家の先輩に「彼は学問的にもしっかりしている。法務省が司法試験審査委員に任命するような公正中立の人である」という文書を書いていただくことにしたのです。

総長選挙の結果は、決定選挙で私が五五五票、本明先生が四二一票と、たいした差はありませんでした。それで新聞はこの新聞も「前途多難」と書いた。しかし、私はある種の社会科学的な見方で、「これは大変ではない」と見ていました。

総長選挙が終わったあとの人事で、私はこの内外の対立を残さず融和を図るということを大きなテーマにしました。例えば、本明さんの派で大変働いた有能な職員、恐らく彼自身、脇へ追いやられるだろうと覚悟していたと思うのですが、彼を黙って大事なポストに着けたということがある。村井先生についても、本明さんの推薦人を引き受けられた何人かの先生についても、それぞれ違うきちんとした手当てをしています。そして、私がお願ひしたら、これらの先生方もしつかり引き受けてくださったのです。これは「後遺症を残さない」という私の政策の表れで、現に歴史的に見て、後遺症は恐らく残らなかったでしょう。これは私の誇りとするところです。選挙戦が六月で、その年の一〇月二一日に創立百周年を立派にやったということで、何となく気分が変わった。年明け以降、もう対立は全くなかった。しかし、そうなるには私の工夫と努力があったのです。それはやはりどこかで注目していただきたいことです。

### 早稲田の世紀末

西原 一九九九年一月三十一日というのは、普段と同じただの一日に過ぎないけれど、ものすごく厚い壁なのです。翌日から世紀が変わるのですから。歴史がそれに向かって、グーッと流れていくと、そこに猛烈な圧力が生じます。一九世紀末のヨーロッパにおける学術の流れにもそれが表れています。世紀の転換とともに一気に変わったのです。例えば哲学についていうと、一九世紀の後半は科学技術万能の時代でしょう。科学技術万能の思想は人間を物と同じにしてしまうのです。その方向へ時代が一挙に進んで世紀末に至ったとき、「はたしてこのままでよいのか」という人類のうめきの中から新カント学派が生まれてきて「人間は物ではない」という人間尊重の哲学を唱えた。それが世



紀の転換とともに爆発的にヨーロッパに普及した。私は社会科学の人間として、そうした流れを知っているのです。

それと同じで、入試不正事件から所沢・幕張論争、そして総長選挙に向けた混乱という一連の不祥事は、早稲田のそれまでの一世紀のさまざまな毒素が一斉に出てきたものだとは私は見ているのです。早稲田の世紀末。私はそういうふうに見ていたから、世紀が変われば違うと、上手く対処すれば変わると考えていて、事実、その通りになりました。その辺は、何か超自然的な見方なので、あまり表立って言い現わすことはできないのかもしれませんが、百年の歴史の中では、そのように位置づけられるのだと私は確信しています。新しい世紀に入ってだいぶ経た今では見当が付きにくいと思いますが、当時の私はそれをひしひしと感じていました。

それにしても、そういった性格を持つ世紀末現象の処理を担当したのが私だったのです。早稲田をどん底に叩きこんででしょう、不正入試事件は。毎日毎日、早稲田は叩かれた。前年叩かれ、また翌年にも叩かれた。所沢・幕張論争だって希有な大事件です。その担当もやった。私はそういう生れなのだと思うざるをえません。

大学紛争が一番盛んだったのは一九六九（昭和四四）年です。その前の年から次の年にかけて、私は法学部の学生担当教務主任をやっているのです。「学生担当なんか嫌だ」といえば、私は逃げられたはずでした。それでも逃げられなかったのは、要するに、そういう時期に私が年齢といい、役割といい、担わなければならない立場にいたからです。そういう立場の人が逃げたら、組織がおかしくなってしまうのです。だから、これはやはり一種の天命だと。そう考えると、私は昔からずっとそういう役割を演じている。そういう人がいて、事件が起こったときにそこにいるというのかな。入試不正事件の担当にしても、私が国際交流担当の理事を「外国へ行くからだめだ」と、断固としてはねつけていたら、ならなかったかもしれないでしょう。そういう運命の糸を感じます。早稲田の百年の歴史の間、沈殿した汚い澱から生まれてきた毒素が、一斉に世紀末に噴出した。それを処理する役割をしたのが西原だった、こう

いうことだと思っています。それはどちらかというと後ろ向きな役割だから、あまり歴史に残らないし、華やかではないのです。でも、誰かがやらなければいけなかった。

### 本部棟の建設とホテル誘致

西原 その例をもう一つ申し上げますと、本部棟の建設ということがあります。私は今後の早稲田の発展のために、二一世紀には古くなった校舎を建て替えていかなければならないと考えていた。ところが、校舎を建て替えるというのは簡単ではない。今よりもっと大変だったのは、当時は工場等制限法と首都圏整備法に従って、二三区および武蔵野市には新しい校舎を作つてはいけないことになっていた。つまり新たに教室は作れない。ところが校舎を建て替えるためには、キャンパスの中に他に授業ができるスペースを作らなければならない。これは難問でしょう。

そこで注目したのが一号館です。一号館はその時、本部として使っていたのですが、あの建物は実は昔は教室でした。私の学生時代、そこは法学部の校舎だったのです。それが八号館に移り、そこに本部が入ってきた。けれどもそこは教室として登録されたままでした。本部として使っていたけれども、登録は教室。だから、本部を他に移転すれば、一号館を教室として使える。そうすれば順次校舎の改築ができると。そう考えたのです。

それでは、新しい本部棟を作るにはどうすれば良いか。第一に予算の問題です。お金を使わずに建物を建てるにはどうすればよいか。私が考えついたのは、一つは土地信託方式であり、もう一つは安部球場の向こうの五千坪の土地を利用して都市再開発事業をやるということでした。

第二の問題は、本部棟をどこに建てるかということです。土地信託との関係でいうと、それは大隈会館の隣の二二

号館が良い。二二号館には学生食堂がありました。だから、そこに本部棟を建てるためには、まず学生食堂を移転しなければならぬ。そう考えて作ったのが、今の学生食堂（大隈ガーデンハウス）です。さらに、当時、あの場所には演劇サークルの練習室があった。ということは、それをどかさなければならぬ。そこから始まるのです。

学生食堂を建てるためには、演劇の部室を移転しなければならない。演劇といえは、当時はまだ学生紛争の名残があるから、全共闘みたいな勇ましい部員がいっぱいいるわけです。大変だったんですけども、それを何とか口説き落として、それで学生食堂を建てた。非常にいいものができたでしょう。しかも、学生食堂に行くまでに、非常に良い小道が出来た。それまでは誰も大隈講堂の回廊に大隈さんの銅像があるなんて知らなかった。あれも副産物です。そして、そこに平和祈念碑を建てた。そういうことがあるわけです。

こういうことは歴史に残らないでしょう。しかし、それがあったから今の本部キャンパスの大改築ができています。私の知恵と努力がなければできなかったことで、そういう歴史だけは明らかにしてほしい。そういう地味な役割をやりました。今の発展の基礎は明らかにあのときに築かれたと私は思うんですね。

本部棟建設の話に戻りますが、予算面については、大学にお金はない。タダでやるしかなく、そこで考えたのが土地信託方式でした。そのためにホテルを誘致することになりました。

当時、三神記念コートというテニスコートがあった。あの頃はバブルの最盛期で、テニスコートの土地が坪八百万円から九百万円という時代でした。だから、土地信託という方法が可能だったのです。五年後ではもうできなかったでしょう。三神記念コートの移転先を見つけて、移転していただくという交渉をして、その土地にホテルを誘致しました。誘致するホテルは、いろいろないきさつからリーガロイヤルホテルということになりました。先方も、大阪の最高のホテルであるリーガロイヤルが東京にないということで、東京に作りたいと考えていた。リーガロイヤルは住

友と関係が深かったらしく、住友信託の会長が早稲田の出身だったということもあって、決まったのです。本部棟の建築資金は一年に七億円払わないといけない。その七億円がちょうど土地信託料で賄われましたので、早稲田はタダで本部棟を建てたことになるのです。現金を払わないで、タダで建てているわけです。

それから、ホテルについては百周年記念事業の中に、校友と学生の交流の場所を作ることが入っていました。リーガロイヤルを作ればそういう場所になるだろうということで、その事業を吸収させた。だから実現できたわけです。「早稲田が高級ホテルを作るとは何だ」とか、いろいろ冷やかされたし、いろいろ批判もありましたけども、やはりこの計画でよかったと思います。

### 早稲田カードの発案と事務の電算化

司会 先生は刑法がご専門ですが、大学の経営のことについては、どのようにして勉強されたのですか。

西原 法的思考というのは、実はシステム思考なんです。「このためにはこれ、このためにはこれ」と考える物事の順序というのは、法的思考の中に入っているのです。それが経営にも関係していると思う。私は個人としてはお金もうけのことにあまり関心がないけれども、現実はその職につくと、経済のことを考えなければいけません。すると、お金を出さないでどうするかということをするべき考える。貧乏人だからそうなんでしょうね。

例えば、早稲田カードも私の発案です。早稲田カードの趣旨というのは、もともと校友の住所を把握することだったのです。校友は住所が変わると把握できなくなってしまう。校友に募金をお願いするときに、名前は分かっても連

絡が取れないと、募金は集まらないわけです。それで、住所を把握する方法は何かということを考えているうちに、思いついたのがカードなんです。つまり早稲田大学で把握できなくてもカードでしたら、カード会社が把握できるわけでしょう。

校友も新たなカードを作るとお金がかかるから嫌だろう。しかし、元のカードを早稲田カードに切り替えると、カード会社は同じですから、お金は払わなくても良い。さらに、元のカードを早稲田カードに切り替えると、それまでのカードで支払っていた額の一部が母校のためになる。そうなると、早稲田カードに入ってくれるだろう。こういうのが私のアイデアだったのです。そうした発想がどうして私に出てくるかといえば、やはり、タダで利益を生み出すという貧乏人根性です。

それから、大学経理についていえば、私がやったことの一つに電算化があります。

司会 それはどういうことでしょうか。

西原 大学事務の電算化は、まず、入試業務から始まりました。そして教務、人事、経理と、その四つで、十年かけて完成したんです。あれは常任理事の濱田（泰三）さんの発案でもあったけれども、私が先頭に立って推進しました。

当時、早稲田大学は、人件費が経常費の七十%を占めていました。これは高過ぎです。私は私大連の会長をやっていましたから他の大学の経理も知っているのですが、七十%という大学は他にないです。そこで、五十%にまで人件費の割合を下げるのが目標だけでも、それをするためには、事務の電算化と選択定年制の採用をする必要があった。

その頃、窓口業務にアルバイトが多数いました。窓口業務は人間でなくてもできる。機械でできるものは機械化し

ようと。アルバイトですから、解職するのではなく、新たに採用しなければ良い。選定年制の方も、個人のいろいろな人生設計の中で、そういう制度があったらいいだろうと。それに早稲田の給料は高いですから、年長の人が辞めると、大学は財政上楽になるのです。

そのように何とか人件費を下げようとした結果、十年間で六十%というところまできました。十%減ったんです。それでもまだ高かったけれども、七十%を六十%にする先人の努力があったということはきちんと踏まえてもらいたいと私は思います。

## 一〇〇周年記念の募金活動

西原 百周年記念事業についてですが、事業を進めるためには多額の寄付金を集めなければなりません。ところがその最中に入試不正事件が起こって、募金どころか、記念事業そのものに対する反対が生じるようになりました。反募金運動まで起こったんです。早稲田の先生で、企業へ行って「早稲田の募金には応ずるな」と言う人がいるぐらいでした。私が総長に就任したときには募金の目標額二百億のうち、三十七億円しか集まっていませんでした。しかも、募金委員長をやっていたソニーの井深〔大〕さんが、所沢・幕張論争で村井さんが負けたときに委員長を降りてしまった。井深さんは村井さんとは同級生で、村井さんにお付き合いせざるを得なかったのです。そうすると、「井深さんのような人が降りた募金には応じなくてもいいのではないか」という雰囲気が出てきます。

そこで、私は井深さんのところへ出かけて行ってお願ひしたんです。「募金委員長を降りられるのはわかるけれども、早稲田の将来を考えると百周年記念事業を何とか完遂しなければならない。何とかお手伝い願えないか」と。井

深さんは村井先生と親しかったけれども、私の行動もきちんと見てくださったようなのですね。私のいろいろな苦闘の様子を評価してくださっていたらしいんです。それで、「募金委員長は引き受けられないけれど、あなたが一緒にやってくれと言うところは必ず行きますよ」と言ってくださった。あのときの私の喜びは、もう本当に例えようがありませんでした。

例えば電機系では、ナショナル（パナソニック）、東芝、日立、そういうところがリーディング・カンパニーでしょう。そこからの募金が一億円になるか、五千万円になるかで違ってくるのです。ここが五千万円になると、次が二千万円になってしまふ。これが一億円になると、次が五千万円になる。そうしたリーディング・カンパニーに一番最初に行くときに、井深さんは一緒に行ってくださった。そこで恥もかかされているんです。「井深さん、あんたが降りたりなんかするからね、われわれ企業はもうあんまり寄付したくなくなってしまうんだよ」などと言われた。しかし、井深さんは、頭をかきながら、「いや、まあそうだけど、何とか頼むよ。早稲田だから」と言ってくださって、それで結局、一億円になりました。もう一つは日産、トヨタ。これが幾ら出すかで次が違ってくる。井深さんはやはり一緒に行ってくださって、一億円になりました。そういうときに必ず一緒に行ってくれたということがあったんです。感謝のほかありませんが、これもひよっとしたら私の人柄がもたらした成果かもしれないと、私自身は密かに誇りに思っているのです。

結局、百周年記念募金は二百億円のうち大体百五十億円余り集まった。当時は利子が高かったし、実施までに時間がかかったから、合計百九十五億円になりました。百周年記念事業計画のうちでも、さきほど触れた「校友と学生との交流の場」は土地信託という別の方法でできましたから、最終的に目標額に到達したことになります。

だけでも、それまでには大変な苦勞がありました。当時の学内は独特の雰囲気でしたから、新しい記念事業をど

うするかということについて、反募金運動が起こるぐらい議論が盛り上がってしまった。しかし、早稲田発展のために評議員会決定があつたのですから、基本的にはその決定を踏まえながらやっていかないといけない。そういう中で、私は百周年総合計画審議会という会議体を作つたのです。これは早稲田の歴史上初めての、教員と職員が同数の百二十五人の会議体です。そこで「徹底的に議論しましょうよ」ということで、反対派も必ず入れました。会議では、しばらくはその反対派の人が長演説をぶつたのです。三回ぐらい反対派の長演説があつて、他の人たちはみな黙って聞いている。けれども、しまいには皆もう飽き飽きして、「総長、もうこの辺で理事会案を出していんじゃないの」と。そういう頃合いをみはからつて、私が三十分の大演説をぶつと、「これで行きましょう」ということになった。雰囲気を見ながら原案を作つて、修正し、決定して、それでも誰からも反対運動が起こらなくなった。

教員と職員は「車の両輪」というけれども、実質的にはそうではないのではないか。やはり職員のエネルギーや知恵を反映させていかなければならない。そう考えて職員、教員同数の会議を初めて作つたのですが、非常に成果があつたと私は思っています。ものすごく時間がかつたし、苦労したし、お弁当を食べながらですからお金もかかつたけれども、そうした会議があつたからこそ百周年記念事業が完遂できたのです。

### 人間科学部の設立

西原 次に、新学部の設立の話になりますが、医学部を持ちたいという願望が、校友を含め、早稲田にはあります。例えば早稲田が英文の論文数で慶応に劣るのは医学部がないからです。それに、国からの補助金にしても医学部があるかないかで総額に決定的な影響がある。補助金の総額が少ないと慶応より劣るように見られてしまう側面もあつ



て、そういうことを考えれば、医学部があるといいなと、私自身も思います。

けれども、総長に就任した当時の私は、医学部を新しく設立するなどということは到底できないと思っていました。特にあの頃は看護婦さんのストがあつたり、大変な時期だったのです。当時の慶応の石川〔忠雄〕塾長が私に、「いやあ、西原さん、早稲田には医学部がなくてほんとにうらやましいよ。早稲田は医学部を持たない方がいいよ。もうとにかく人件費が大変なんだ。お金も大変なんだ」とおっしゃるのです。ひょっとしたら慶応が早稲田に医学部を作らせない謀略かもしれないから、ちょっと間引いて聞かなければいけないと思いました（笑）。しかし、やはり、石川さんの悩みは大変だったらしいのです。

そういうこともあつて、結局、医学部を持つことについては、うまい合併話があればということだったのです。合併自体はかなりあり、私の時代にも二つぐらいありました。今だってあるのではないですか。医学の単科大学というのは卒業生が医者だけでしょう。そうすると、政治家や財界人や文学者の卒業生も欲しいということになる。そういう欲求があるから、どこかと合併したいという意識は医科大学の側にもあるわけです。ところが、推進者は必ずいるけれども、反対者も必ずいる。特に「早稲田みたいな大学と合併すると、早稲田に吞まれてしまって、自分の大学の個性が失われるから反対」という意見が卒業生には当然ありうる。だから、合併話というのは余程の条件を満たさない限りは実らない。しかし、そういう話があれば考えても良いのではないかと。そういうことを考えているうちに、百周年記念事業について、私と直接関係のないところから「人間環境科学系学部案」というのが、「スポーツ科学系学部案」と並んで出てきたのです。

この構想は当時の文学部の先生方が中心になって考えたもので、百周年記念事業計画として評議員会で決定されていたものです。先ほど申し上げたように、百周年記念事業は不正入試事件の影響を受けて大変混乱したのですが、そ

いう中で、人間環境学部について私は一つのフィロソフィーを作った。私はこういうふうに考えようと。つまり、「本当は医学部は欲しい。しかし、医学部はもう既存の医学部があり、病院があり、それらが役割を果たしている。今、日本に不足しているのは病院に入る前と後だ。病院に入らないで済むような人を作るといのが大きな課題で、そのための研究が不足しているではないか。例えば、生命科学とかストレス科学とか、そういう研究を通じて、人々が病院に入らなくて済むようにする。その研究が今までの社会に足りなかったところだ。だから、そうした研究を行う学部を作ろう」と。

私は次のように言いました。「私みたいに激職をやっているのにノイローゼにならないのはなぜなのか。私を実験材料にしたかどうか」と。「人より違う能力があるのかもしれないけれど、私なりの方法があるとすれば、それが役立つかもしれない。ストレスに負けるといのは病気のもとになる。それではストレスがなければ良いかと言ったら、ストレスというのはいかにいけない。また、突然襲いかかってくるものである。ストレスが突然襲ってきて大丈夫のように、耐えうるにはどうすれば良いのか。おそらく私は無意識のうちにその訓練ができている。だから、私を実験材料にしてやれ」と。誰も言ってはきませんでした（笑）。

それで「環境」というのは外して人間科学部にしたので。実は百周年記念事業にあった二つの学部案を、募金が集まらない可能性があるので「総合人間科学部」一つにし、その中に、「スポーツ科学科」を含め、これと、「人間基礎科学科」との間に「健康科学科」というのを設けたのは私の発想なんです。健康科学というのを入れて、基礎科学とスポーツ科学をつなげる。スポーツも入院するのを防ぐ方法と考えれば、健康科学の対象になるわけでしょう。そういう一つの学部を作るということにしました。当初の名称は「総合人間科学部」でしたが、文部省の審査の中で、他の私大人の主張の結果、「総合」を外されてしまったのです。

その点について、当時の日本医師会の会長の人。

司会 武見太郎先生ですね。

西原 そう、武見さんです。あの人は慶応の出身ですが、ある会で一緒になったときに「こういう構想を持っているんだけど、どう考えですか」と聞いたたら、「それはいい」と言うんです。「わしは前から慶応にそれをやれと言っているのに、慶応は一向にそれをやらない。早稲田にぜひそれをやってほしい」と。「だけでも、われわれは病院も医者やスタッフも持っています。それでもできるんじゃないか」と聞いたたら、「そんなことは簡単だ。既存の医学部、既存の病院と提携すりゃいいんだ。その人たちを利用すりゃいいんだ」というふうにおっしゃっていました。すごいですね、武見さん。それで、そういう方式で、できるだけ医者については提携学部を作ってやろうという企画を立てました。

体育局には「スポーツについては、いずれ学部として分かれていくことがあるだろうけれど、独立する前に『健康科学の一環としてのスポーツ科学』という観点を持ってほしい。だから、当分の間は同じ傘の中に入るべきだ」ということで、当初、納得して頂きました。

とにかく募金が三十七億円しか集まっていなかったんですから、百周年の事業計画は縮小せざるを得ない。しかし、縮小するからには、むしろフィロソフィーを持ってやろうということ。で体育局にも理解していただいたのです。

例のフィギュアスケートのゴールドメダリスト羽生結弦は人間科学部ですね。彼も、やはり健康科学を基礎にしたスポーツ科学という理念があるから来ているのだと思うのです。私の意図がきちんと実現しているなということを感じ

じます。

### 総合学術情報センターの建設

西原 百周年記念事業については、総合学術情報センターのこともあります。

安部磯雄先生はご在世中に、「もしこの球場を本部に渡すようなことがあったら私の銅像を埋めろ」とおっしゃっていたのだそうですね。だから、安部球場の場所に総合学術情報センターを建てたいと野球部に申し入れたときは、もうすごい団交になりました。しかも、団交の相手は私が少年時代に憧れていた名選手です。昔はプロ野球など誰も見ていないし、報道もされない。それよりも早慶戦なのです。その時代の早慶戦の立役者の大先輩が、「総長、あなたの考え、間違つとる」とくるのですから、それはもう大変です。

それでも、野球部OBの中に理解者がいたのです。「これは歴史の発展の上で当然だ。これは譲らなければいかん」といつてまとめてくれた人がいた。相田さんという方で、もうお亡くなりになったけれども。

司会 最後の早慶戦の開催にも尽力された相田暢一さんですね。

西原 そうです。その相田さんが間に入って活躍してくださったということがあって、譲るという結論が出た。その代わりに東伏見に今よりも立派な、神宮球場と同じような野球場を作ること、それから安部磯雄先生と、もう一人、飛田穂洲先生の銅像を新しい情報センターの脇に建てて、そのいきさつを書くということ、その二つを条件にまとめ

てくださった。それで総合学術情報センターができたのです。

最初の一年間の新図書館の利用者数を見て私は驚きました。旧図書館の利用者数の十倍です。なかには冷暖房完備だから居眠りするために行くという学生もいるかもしれないが、私は居眠りするためでも図書館に行くことが大事なんだと思うのです。だから、それでもいいんだと。とにかく十倍というのはすごいです。学生の学問のためには大変な重要なことだったと思っています。これは安部球場の跡地でなければできないことでした。

司会 近いですから。

西原 そう、近い。だから、野球部の先輩たちのご苦心やお悩みには大変感謝をしているんです。特に相田暢一さんの先見の明には大変敬意を表しています。相田さんだけでなく、何人かの方々が中心となってOBをまとめてくださった。

### 職員制度改革とスポーツ振興

司会 予定のお時間が迫ってまいりました。これまでのお話で付け加えることはございませんか。

西原 一つは職員制度改革についてですね。私は教員、職員は早稲田の基本的構成員であると位置づけて、一つの理論を建てているつもりですが、これは入試不正事件の産物でもあるんです。

入試不正事件についてはこういうことがありました。私が法学部長だった時代に、商学部長が「法学部では入試答案を採点中どうやって保管してるのか」と私に聞いてきた。「いや、ロッカーに入れてね、それへ目張りして、そこに学部長の判子を押すんだ」と答えると、「そんなことしているからだめなんだ。わが商学部では職員に泊まらせて職員が管理しているんだ」と威張っていたんです。その職員が、実は夜泊まっている時に点数の改ざんをしていたんです。有能な職員のモデルみたいな人がいて、その人がやったのですから。秘書課にもやったひとがいて、有能な幹部職員でした。だから、人間というのは信頼できないと心の底から思ったのです。有能な職員で、誰もが評価していた人たちが、ああいうことをやって、誰も気がつかなかった。恐ろしいです。

そのときに私が考えたのは、「人間は、本来、誰も信用できない。だが、組織の中で一緒に生きる以上は信用していかねばいけない。信用してその人に任せなければどうしてもできないことが多い」。そのためにはどうするかといえば、「人間は信用できないものだということを前提として制度を作る。その制度を作った以上、その上に立つて人間を信用する」。こういうことで考えたのが、新しい職員制度なんです。あの入試不正事件の、あの痛い、痛い経験から。それを一緒にやったのが山代〔将〕さんでした。

もう一つ付け加えたいのはスポーツです。例えば、今行われている全国優勝した部に対する総長招待昼食会は私が始めたのです。その頃、早稲田のスポーツが弱くなっていて、そういうときに、ある人から「総長、慶応では早慶戦に勝つと塾長がお昼ご飯に招待してくれるそうだ」と言われたのです。「いや、私はやらん。早慶戦で勝つのは当たり前だからやらない」と言ったのですが、「だけでも、全日本で優勝するのは、昔は当たり前だったけれども今は大分難しくなった。早慶戦ではなくて全日本大会で優勝した人は呼ぼう」ということになって、総長招待昼食会を作りました。最初の年に全国優勝したのは合気道だけでした。合気道部は部員が少なかったので、総長・理事と同じぐら

い的人数で、まるでお見合いみたいでしたが、そこから出発したんです。そうしたら、だんだん在任中に強くなって、駅伝も勝ち、ラグビーも勝ち、野球も勝ち、それで年に二回やるぐらいになりました。ああいうのもやはりスポーツ振興に役立ったのです。

こんなこともありました。ある時、ラグビーを見に行くと、早明戦だったと思いますが、負けてしまったのです。日刊スポーツの記者が寄って来て、「総長、負けたようですね。どう思いますか」と聞いた。「いや、大変残念だ」と。それから「教育学部の体育特別選抜を二倍ぐらいにしたらいいと思うな」と言ったのです。そうしたら、翌日の日刊スポーツにでかかと「西原総長、爆弾発言」と出てしまって、「体育特別選抜を二倍にする」と書いてある。

教育学部に体育特別選抜を作った頂いたのは私です。教育学部には体育教員養成の役割がありますから。ただ、確かに特別選抜制度を作ったけれども、三年ほど様子を見てその後のことを決めるとというのが教授会の決定だったので。それが「二倍にする」「爆弾発言」と大きく報道されてしまった。「ああ、これはもう教授会から怒られてひどいことになるな」と思ったのですが、あまりひどくならなくて、現に翌年に特別選抜を二倍にしてくれて、それで強くなりました。ですから、今と比較したらほんの小さいことでしたが、戦後もっともスポーツが弱くなった当時としては、私はスポーツ振興にもいささか貢献したと思っていますのです。

司会 大変、貴重なお話を聞かせていただきました。長時間ありがとうございました。